効果的・実践的授業のすすめ方

―大学授業改善の一手法として―

An Essay on the Effective and Practical Teaching

―As a guide to the improvement of teaching technique―

赤堀　勝彦

Katsuhiko Akabori

（論文要旨）

本稿の目的は、最近の高等教育の大衆化や大学の自己点検・評価および認証評価の義務化、その他大学授業改善などの背景を踏まえて、効果的・実践的授業のすすめ方について考察することである。

昨今、大学では入学してくる学生に履修科目の選択をアドバイスするだけではすまなくなっており、いかに熱心に学ぶかなど、学ぶための道筋を示すことも求められている。

大学授業改善の要点としては、学生が主体的に学びに向かう態度を身に付け、学生が自ら学習意欲を高め大学を積極的に活用するように運営していくことや教員相互による授業研究、学生、職員、社会人などを含めたオープンな授業公開の実施などが挙げられる。特に、学生の主体性を引き出し、やる気をそそることが重要である。また、以前から、教えることは、”art”(芸術)であるとも言われてきているが、授業の効果は、担当する教員の力量に左右されることが多く、担当教員の役割は非常に重要である。

（Abstract）

The purpose of this paper is to consider the effective and practical teaching in view of the recent popularization of teaching in higher education and the obligation of self-assessment and certified evaluation of the university.

Now, most of the university is required to the students not only to advise choosing their curriculum, but also to show the course of learning to them.

The main points of the improvement of teaching are considered to carry out the active learning of the students and to open the class to the parties concerned. It is especially important that the teachers urge the students to ask questions and to solve the problems of the subject.

It will be noticed that teaching has been referred to as an “art”. The effect of teaching depends mostly on the ability of the teachers in charge of the subject and therefore a role of the teachers is very important.

キーワード：効果的・実践的授業、授業改善、ファカルティ・ディベロップメント、授業公開、参加型授業

Key Words：effective and practical teaching, improvement of teaching, FD :faculty development, opening of teaching, active learning

---

神戸学院大学法学部教授

1．はじめに

―大学授業改善の背景

多くの大学が教育内容の改革、大学授業改善を進めている背景としては、まず、大学教育の大衆化、すなわち高等教育の大衆化が挙げられる。わが国が直面する大学改革の最大の課題は、この高等教育の大衆化をどう真正面から受けとめ、高等教育の質を21世紀の社会的要請に応えるものとして高度化していくことにある[1]と考える。また、大学への入学人口の増加により学生の大学教育への期待や希望も多様化している。したがって、大学もそれらの学生の多様な要求にあった教育環境を作ることが求められている[2]。大学全入時代、大学大衆化時代が到来し、大学入学生の変化に対応した教育が求められているのである。

次に、大学の自己点検・評価および認証評価の義務化[3]が挙げられる。すなわち、2004年度から大学は、教育研究等の状況について一定期間ごとに文部科学大臣から認証を受けた評価機関による評価（認証評価）を受けることが義務付けられている。また、大学設置基準一部改正（2008年4月1日施行）により「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」（25条の3）こととされ、大学でのFD[4]が義務化された[5]ということになる。

さらに、学力やモチベーションの低下、将来ビジョンを描ききれない学生の増加、全入時代に向けた魅力ある大学づくりにより学生を確保しようとする危機意識などが教育内容の改革、大学授業改善を進めている背景として挙げられる。

本稿では、以上挙げた大学授業改善などの背景を踏まえて、効果的・実践的授業のすすめ方について考察することとする。なお、本稿は2007年11月に開催された神戸学院大学第15回FD・SD講演会「効果的な講義のすすめかた―眠くさせない授業を目指して―」での報告[6]を発展させたものである。

2．大学授業改善の要点

昨今、大学では、かつてのようにただ講義を提供して、入学してくる学生に履修科目を自由に選んで勉強するようにというだけではすまなくなってきている。いかに学ぶかなど、学ぶための道筋を示すことも求められている。以下に、大学授業改善の要点を挙げることとする。

2．1　教員中心の大学から学生中心の大学へ

今や、学生が自ら学習意欲を高め、大学を活用する時代が来ているのではないか。これまでの大学運営は、一般に教員中心で進められてきたきらいがある。例えば、カリキュラムの開発にしても、「学生に必要なカリキュラムは何か」というよりも「現在いる教員でできることは何か」という発想で組み立てられてきたことが多い。しかし、大学の論理で大学を運営していたのでは、今後生き残るのは難しい[7]と考える。今後は、学部ごと

に定期的に学生との懇談会を開催し、授業改善に関する率直な学生の意見を聴取し、必要に応じて実行するという積極的な姿勢が大学に求められるということである。

また、初年次教育が重視される理由は、最近の学生の学力や学ぶ意欲の低下、推薦入試やアドミッション・オフィス（AO）入試[8]の定着に伴う学習履歴の多様化に加え「友人や部活の先輩・後輩、教職員との人間関係を構築することも大切」といった大学生活の心構えを教えることも重要なテーマの一つになると考えられるからである。

このように教育内容の変化と共に、教育方法についても教員中心の大学から学生中心の大学へのパラダイムシフト (paradigm shift) に伴い、大学における学びも教員中心の Teaching　から学生中心の Learning へと変化している。すなわち、学生が主体的に学びに向かう態度を身に付けなければ、学生自身が真に大学改革の成果を享受することはできない。したがって、今や学生が自ら学習意欲を高め大学を積極的に活用する時代になっているのである。

２．２　授業公開の実施

現在、FD を実施している大学は年々増加しており、2008 年度現在 727 大学（約 97％）が実施している[9]が、その参加は問題意識を持つ教員に留まり、教育改善に関心が薄い教員の参加となっていない。また、FD の内容・方法を見ても一方通行的な講義型のスタイルが多く、問題点を議論するような討議形式や学生とのコミュニケーションを図る授業参加型など実質的な FD が極めて少ない。このような現状を打開し、授業の一層の改善を図るためには、FD を支援する組織･体制の整備充実のほかに教員相互による授業研究、学生、職員、社会人などを含めたオープンな授業研究（授業公開）の実施が指摘されている[10]がまさにそのとおりであると考える。授業公開のメリットとして、情報の相互提供や参観者も授業に入ることにより相互に良い緊張感と刺激が得られること、授業技術のヒント・意見交換などが得られることなどが挙げられる。

さらに、FD の成否は大学のリーダーシップで FD の参加を義務付けるのではなく、教員の自主的な参加によることを基本とすることから教員自身による教育力の自己点検等が重要である。そのためには、専門分野ごとに教育力の点検項目を整理するなど教員が自主的に自己点検・評価ができるような仕組みが大学内で構築されることが求められる。

２．３　学生による授業評価と課題

学生が大学の授業に対して改善を求めているのは最近に限ったことではない。例えば、文部省（現文部科学省）の「大学改革の今後の課題についての調査研究」（1995 年）によると、学生は、「分かりやすい」、「役に立つ」、「社会のニーズにあった授業」、「少人数で目の届く指導」、「授業方法の工夫」等を望んでおり、「教員の授業内容・授業方法」、「教員との触れ合い」等について不満を持っていることがわかる。

現在､学生による授業改善（評価）アンケートは､全国の多くの大学で実施されているが、その目的は学生が受講した授業とそれをサポートする体制について、今後、少しでも改善するために行うことにある。学生による授業評価の結果は、教員の授業改善に役立て

なければならない。

また、授業改善（評価）アンケートには、例えば、マーク式記述欄として「教員の説明は聞き取りやすく、明瞭でしたか。」、「黒板、パワーポイント、OHP などは見やすかったですか。」、「教科書、レジュメなどの教材は適切でしたか。」などがあり、また、自由記述欄として「授業について意見など教員に対するメッセージがあれば、自由に書いてください。」などの設問が設けられている。

アンケート実施後、詳細な調査報告書が作成されているが、現実に学生の授業理解度などに関して言えば、アンケートが示すような成果が挙げられているかは疑問である。また、今後の課題として、アンケートは記名式で、記述する部分を多く取り入れることを提言したい。理由は、学生が責任を持った意見が授業改善（評価）アンケートに反映されることが望ましいからである。無記名式だとやる気のない学生はいい加減にマークすることになる。また、不真面目な学生は、熱心な教員の授業には反発することもあり得る。一方、記名式にすると学生は授業批判すると自分の成績評価に影響されるリスクがあるということで批判することをためらうかもしれない。その場合の対策としては、担当教員はアンケートを学生に配付するときに、アンケートの趣旨を述べると共に「建設的な批判は大いに歓迎する。」ことを伝えておくと良い。その結果、授業に批判的な学生と十分話し合う機会を持てば、学生および教員相互にとって授業改善の効果は一段と上がると考える。

３．効果的・実践的授業の実施

以前から、教えることは、”art”(芸術)であるとも言われてきている[11]。

授業の効果は、担当する教員の力量に左右されることが多く、担当教員の役割は非常に重要である。また、同時に受講する学生との出会いを通じて、教員自身もいろいろなことに気付き成長していくものと思う。

いかに優れた専門知識を有していても、授業の仕方が拙劣で聞いてもらえなければ効果はなくなってしまう。授業の内容を体系付け、流れをすっきりと、分かりやすく、強調点のヤマ場を何回か作りながら、動きのある活性化した授業を展開していく必要がある。使用テキストに加えて板書や資料を提示するとともに、質問をして考えさせることや発言するように指示することにより参加意識を持たせるなど、工夫をしながら活気のある授業にすることが重要である。以下に、効果的・実践的授業の要点を挙げることとする。

３．１　効果的・実践的授業の基本的心構え

⑴　熱意を持って行う

学生に伝えたいという気持ち＝熱意（情熱）が重要である。熱意があれば学生の気持ちをつかみ、共感を呼ぶことができる。

⑵　事前準備は入念に行う

情報が刻々変わるため、その情報を取り入れるためにも事前準備は欠かせない。

⑶　常に学生が中心であることを認識する

どんなに格調の高い講義をしても、学生に伝わらなければ無意味である。

３．２　学生がのってくる授業のすすめ方

⑴　授業改善のきっかけ

授業改善のきっかけは、学生に腹を立てることから始まることが多い。私語･居眠り･大あくび・携帯での通話・遅刻・課題を提出しないなどである。こうしたときに、次のような対応をする教員が多いようである。

①教員の言うことをきかない者は、「受講するな」、「教室に来るな」、「単位をあげない」などと宣言する。その結果、かなりの学生が出席しない事態が生ずる。しかし、出席しない学生全員を落とすわけにはいかず、評価を甘くして事を処理する教員もいる。

②繰り返し叱り付ける。最後は疲れ果てて諦めてしまうこともある。

③すぐに教室から出させる。

⑵　学生をのらせる方法（双方向型から多方向型へ）

学生の主体性を引き出し、やる気をそそることが重要である。筆者が行う参加型授業の場合、学生の発言が決定的に重要であるが、なかなか発言しようとしない場合には、たとえ極めて低レベルであっても、発言したこと自体を評価の対象とすることにしている。つまり、授業への積極的参加を勧めている。学生に教員が質問し、対話による参加型授業を進めることは、学生の主体的学習を促す強い動機となるからである。具体的な方法は次のとおりである。

①学生を指名して前回の授業の復習を前に出て５～10分ほど発表するように指示する。授業では、学生に配布するレジュメは学生に準備するように指示することもある。効果としては、プレゼンテーション力の向上とレジュメ作成による文書力の向上に役立つ。また、発表者には全員で拍手するように指示する。その効果としては、感情を全員で共有することができるということである。

② 発表後学生同士で質疑応答を行う（5～10分程度）。

質問が出ない場合は、発表者より「座席指定表」または「履修者名簿」を見て質問者を指定し、「〇〇さん何か質問ありませんか？」と質問するように促す。質問ないと答えた者には理解を確認するために教員から質問し、答えられない場合はレポート作成を課し、次回提出するようにと宣言する。なお、すぐに質問ができない場合は、2～3人の質問者の後、再度質問するように言う。効果としては、学生はいつ指名されるかわからないため発表者の説明を熱心に聞き、緊張感を持続させることができる。また、質問をしてくれた学生には、「質問有難うございます」という感謝の気持ちを伝えるように指導することにより、質疑応答のマナーを身につけることができる。

③大人数クラスの場合は、復習発表に加えて、授業の進捗状況を見て、事前に課題を提示し３～４人一組のグループ発表も取り入れることもある。復習発表と同様にま

ず希望者を優先し、希望者がいない場合は適宜発表者を指名する。効果としては、事前に課題を行うことにより、当該科目に対する理解が深まる。また、グループ同士で共同学習することによりゼミナール（演習）のときとは異なった新しい仲間作りができる。特に、1時限目の授業のときは、早めに教室に来て、レジュメに書いている項目を板書するので、早起きの習慣を身につけることができる。

④質疑応答で発表者が即答できない場合は、質問の内容により次の方法を採用する。

（ア）発表者に調べるように伝え、次回の授業で追加報告するように指示する。

（イ）他の学生に質問し、回答するように言う。

（ウ）教員が解説する。

⑤ゼミナール（演習）のような少人数クラスの場合は、さらに発表について学生同士の相互評価（良かった点と改善点）および振り返りを行う。相互評価については、たとえ拙劣な発表であっても必ず良い点を見つけてそれを言うように指示する。温かいコメントをもらえば、自信を無くすこともなく次回発表の励みにもつながるからである。効果としては、指導教員からのコメントだけではなく、自分と同じレベルの学生の評価は刺激になるし、評価する側の学生も熱心に授業参加せざるを得なくなる。

⑥筆者が担当するゼミナール（演習）では、1年次の基礎ゼミナールを含めて、最初の授業では、短時間で全員が積極的に参加できる効果を期待して、自己紹介の代わりに相互にパートナーを紹介しあう他己紹介[12]を行う。また、演習の開始時と終了時には、それぞれ学生に号令（起立と礼）をかけるように指示し、授業を引き締めるようにしている。さらに、3年生は就職活動の開始時期であることから、特に前期は90分の授業を30分加えて120分行う。現在の時間割では、原則として3年生のゼミナールは昼食後の3時限目（13時15分～14時45分）に配当されているため、学生の要望なども聞き、昼休みを30分利用して、当日の日本経済新聞の記事（主に社説、経済、金融関係記事）を早朝に読んで、自分の意見、感想をまとめて1分間スピーチを行うようにしている。これを実施することにより、日経紙の読解力が高まるとともに就職（企業および公務員）の面接や社会に出て大切なコミュニケーション力やプレゼンテーション力が養成されることが期待できるからである。なお、いつもゼミ生には、楽しく、元気で、積極的に授業および合宿・懇親会などのイベントに参加することを勧めている。

さらに、昼休みは誰でも自由時間であることから、他のゼミ生にも希望者には30分間の自由参加を案内するようにしている。

なお、課題を忘れることや、マナー・リスクの発生（マナー違反）として、遅刻や無断欠席、授業中のあくび、私語、携帯を鳴らした学生には、「クスリ」と称して、別途レポート作成・提出を指示することも行っている。この場合の「クスリ」は、単位を落とす「リスク」を回避するための救済策の意味も含まれている。ただし、「クスリ」制度の効果により、学年が上がるにしたがって、マナー・リスクの発生も少なくなり、「クスリ」を配給するようなことはほとんどなくなる。

以上のような参加型授業を実施することにより、学生の顔と名前を覚えられ、教員と学生との距離が短くなり、お互いのコミュニケーションが高まることになる。

また、授業終了前の 10 ～ 15 分を利用して、当日の授業概要と感想や授業に対する要望・質問などを含めた小レポートの作成・提出を課しているが、これにより学生の参加意識が高まるとともに要望・質問に対する回答をすることにより学生との交流が深まるという効果が期待できる。

要するに、教員と学生が何らかのコミュニケーションを取りながら、学生に興味を持たせるように魅力的な授業をするように常に工夫することが重要であると考える。

⑶　大人数のクラスでの講義法

大人数では学生の反応が見えにくく、学生も不明なところを質問しにくいため、授業構成を臨機応変に行うことが難しい場合がある。したがって、大人数のクラスでは、無線マイクを学生に向けて発言を促すことや教壇の上を歩き回るだけでなく、教室内の中央や後部の通路を歩き回るなど多様な学習スタイルを取り入れた授業構成を行うことが望ましいと考える。

筆者の場合は、授業中ピンマイクは教員用として使い、無線マイクは学生に渡して、適宜コミュニケーションを図りながら進めている。また、眠そうな受講生がいたら、テキストの重要な箇所を読むように指示するとか簡単な質問をして睡魔を追い払うように努めている。さらに、私語や遅刻などを防ぐために席を指定することも有効と考える。その場合には、できる限り座席を前方中央に固めることも重要である。座席を指定すれば、受講生の確認が容易にでき、個人名で呼びかけることにより、教員と学生の距離が短くなる。

なお、筆者が「座席指定表」を作成するときは、事前に学生に座席の希望をきくことにしている。理由は、数少ないが、視聴力の問題や精神的な面を含めて学生の個人的な事情を考慮する必要が出てくる場合もあるからである。ただし、当然のことながら、友達と私語をすることや居眠り、携帯を操作したいために後部座席を希望すると思われるようなことは認められないと注意している。

⑷　参加型授業に対する学生の評価

筆者担当の専門科目のうち、各々３～４年次履修科目、１～２年次履修科目について学生から提出された感想文を参考として、若干を以下に挙げることとする（表1）。

表１　参加型授業に対する大学生の評価・感想

①前回の復習発表やグループ発表をすることにより、退屈することや、投げやりな気持ちになることもなく、むしろ興味を持って毎回の授業に取り組めた（４年生）。
②先生と学生との間でコミュニケーションをとるような授業はゼミ以外では初めてであったのでとても新鮮に思えた。また、他の学生が当てられている間でも自分だったらどのように答えるだろうかというように自分で考える習慣が身についた（３年生）。
③いつ当てられるかわからないので常に緊張感を持って授業参加した（３年生）。
④自分の引っ込み思案な性格に少々うんざりしていたので、強制的とはいえ授業に参加する方式のやり方は良い薬になった。また、現在３年生になるが、ゼミ以外でみんなの学生の名前を覚えている先生は初めて見た。（３年生）。

⑤今、他に受講している授業のほとんどが先生の一方的な講義をただ聞いているだけで、いわば「受身」の状態になっている。そうした中で授業への積極的参加ができることは私を含めて他の学生もとても幸せだ（３年生）。
⑥みんなの前で発表すると緊張するし、何を話したらいいかもわからないし、みんなの視線の冷たさにびっくりした。しかし、４回生にして初めて正しい授業の受け方、勉強の方法を学んだ。そして、何より先生が私の名前を覚えてくれていることに感動した（４年生）。
⑦発表や質疑応答をする授業では遅刻をしずらくなり、積極的に授業に参加しやすくなるので他の先生方もこの形式を採用してもいいと思う（１年生）。
⑧大学に入って発表しなければならない授業はゼミと外国語だけだったので積極型参加を求められるこの授業は大変有益である（２年生）。
⑨他の授業にはない参加型は、学生にとってもより分かり易く、より徹底的に授業内容を理解することができると思う（１年生）。
⑩今までの授業と違うのは、自らの頭で考え、言葉に出して報告しなければならない能力が必要であり、その能力をもまた創造してくれることである。この自ら考えなければならないことで一層あらゆる分野の学問に対しても興味を持つことができると考えられる（２年生）。
⑪いろんな意見や考えが聞けてとてもためになる。それに自分の考えを人前で述べることは、必ず社会人になったときに役に立つと思う（１年生）。
⑫自分から進んで意見を出し合う積極的な授業スタイルはスリルがある。特に授業の始めに行われる学生による前回の復習および質疑応答は１次限目で気力不足の脳みそをたたき起こす素晴らしいキシリトールガムであり、カフェインである。絶対服従な母親のモーニングコールのような復習の後は先生の講義、少々襲ってくる睡魔との闘いが最終決戦を迎えるころ、最大の目覚ましとなる次回の復習係りが・・・（１年生）。

なお、参加型授業については、高校と大学が連携して行う高大連携授業においても上掲と同様な感想が高校生から寄せられている。参考として、若干を以下に挙げることとする（表2）。

表２　高大連携授業における高校生（2 年生）の感想

①マイクを生徒たちで回しながら受けるという授業が独特でとても新鮮だった。確かに、この授業は眠くならない。そして、ただ眠くならないというだけでなく、楽しみながら授業が聞けるという不思議な感覚があった。
②今回の参加型の授業を受けて、普段の授業のような感じで、とても聞きやすく分かりやすくて、しかも法学についての話を聞けてよかった。
③最後まで寝ずに授業を受けることができたとともに、授業も分かりやすく、とてもタメになった。でも、当てられたのには驚いた。
④時間の長い授業ならいつもすぐに眠くなってしまっていたけれど、今回の 90 分授業は全然眠くならなくてよかった。
⑤授業が眠くならない方法は、できるだけ発表して、先生とのコミュニケーションをとるのが一番良い方法だと知った。

３．３　魅力ある授業の演出

⑴　今日の授業をイメージする

１回分の授業をどうやって演出するかは、研究室での準備次第である。また、どのような授業を始めたら良いかを知る最善の方法は、最終的に学生に何を達成させたいかを知ることである[13]。

①90分間の授業の流れをイメージし、効果的な授業を行うための準備をしておく。

②導入のトピックスをあらかじめ決めておく。うつむいた学生の顔を上げさせ、これから「なにか興味深い話が聴けそうだ」という予感を与えることが重要である。

③講義メモを作成した場合はそれを見直し、１～２分程度確認する。

⑵　授業直前のリラクゼーションとウオーミングアップを行う

①リラックスする。気分転換をはかる。

②ウオーミングアップを行う。軽く体操したり、発音練習[14]する。特に授業前に発音練習を行うと、授業では声が楽に出るようになるなど効果的である。

⑶　明るく自信ある態度で話す

①自信を持って誠実に、明るく熱意を持って話をする。

②受講生の方を向いて話をする。

③適当に身振り、手振りを加えて印象を強める（ボディランゲージを活用する）。

⑷　正しい言葉遣いではっきりと話す

①少し大きめの声ではっきり話す。

②声の大きさ・高さに気を配る。

③分かりやすい言葉を使う。

⑸　間を活用する

かつて、話術の名人と言われた徳川夢声は、「話術とは、いかに黙るかを研究する術である」と言って、話における“間”の大切なことを強調している。これは、寡黙という意味ではなく、生きた無声部分、これが間であり、話の句読点である。黙る部分と、話している部分がスムーズに連なったとき、初めて話に味が出てくる。まさに、「話術とは間（マ）術なり」である。“間”は、授業の内容に受講生の関心を呼び起こしたり、盛り上げたり、強調したり、考えさせたりする際に大きな効果がある。間を取るところできちんと取ると、話がぐっと引き締まる。

例えば、全体質問をしたら、全員を見回しながら５秒くらい空けることや重要なポイントを指摘したり、質問を出したりする前には一息入れて、全体を見渡すなどである。

⑹　変化を持たせる話し方を心がける

話す目的は、講義内容を学生に理解させることである。学生が分かる言葉で、考え、理解しやすいスピードで、はっきりと話すことが重要である。しかし、同じような調子で話を続けると、学生はおよそ15～20分くらいで飽きがくることが多い。時間帯を考え、眠気が襲う時間があればできるだけ興味深い例え話や実例などを豊富に盛り込むようにする。また、板書する・・・、強調する・・・、質問する・・・、リズムを変える・・・など変化を持たせながら話を進めていくと効果的である。さらに、テンションを上げたり下げたりする声の抑揚などの工夫も大切である。要は、聴く学生の身になって話すことである。

⑺　時間管理をしっかり行う

⑻　クロージング（講義の締めくくり）はさわやかな印象を残す

3．4　学生の居眠り防止

⑴　居眠り防止対策

①声の大きさやアクセント、メリハリを変える。

②インタービューする。

学生に質問し、話をさせる。

③小グループ討議をさせる。

小さなテーマを与え、その場で周囲の学生と小グループ討議をさせる。また、事例発表や、ロールプレイ（役割演技）などの実施も効果的である。

④軽い運動をさせる。

両手を組んでの背伸び、肩のほぐし運動、首の回転運動、腰のほぐし運動、深呼吸など軽いストレッチングをするだけでも効果が大きい。

⑵　居眠りしている学生への対処

①居眠りしている学生の周辺の学生に問いかける。

居眠りしている学生の前後左右の席の学生に簡単な質問をする。それも起立して答えてもらうと効果的である。立ち上がる音や教員とは異質の声によって目を覚ますことが多い。それでも覚めない場合には、さらに他の周囲の学生に問いかける。やがて、居眠りしている学生は、周囲からつつかれて目を覚ます。

②黒（白）板消しを落とす。

黒（白）板の文字を消すときに、さりげなく黒（白）板消しを落とす。居眠りをしている学生は､突然の物音で目を覚ますこともある。ただし､それがうまくいかなかったからといって、続けて２回以上行うことはしない。かえって、学生の反感を買うことになる。この手法は、特に前列で居眠りをしている学生や少人数クラスのときに効果があると思う。

③沈黙する。

授業が単調であったり、昼食後脳が酸欠状態になったりすると、学生の中には教員の話が次第に子守歌に聞こえてきて心地よさそうに眠ってしまう場合がある。そこで、子守歌をやめる、つまり、しばらく沈黙すると、不安になってぱっと目が覚める場合がある。

3．5　効果的な質問の仕方

⑴　質問の効果

①学生の注意を引く。②学生の理解を確かめる。③授業の内容に対する学生の考えを知る。④授業を活性化する。

⑵　質問するときの留意点

①一つの質問には一つの考えだけを盛る。②分かりきった質問、難しすぎる質問は避ける。③原則として、「ハイ」、「イイエ」で答えが終わる質問は避ける。④意味のあいまいな聞き方は避ける。⑤問い詰めるような聞き方は避ける。⑥質問の内容を２度繰り返す。⑦考える余裕を与える。⑧答えが間違っても絶対にけなさない。

４．おわりに

―良い講義と好ましくない講義―

当該授業が高い成果を挙げられるか否かは、その教育内容と担当教員の良し悪しで決まるといえる。どんなに高度で、素晴らしい内容であっても、担当教員の授業姿勢いかんでは受講する学生に「役に立たない」、「もう受けても駄目だ」という印象を与えてしまうことになる。学生に好感を持たせ、自己啓発意欲を喚起させてこそ、授業の成果を高めることができる。重要なことは、教員がどれだけたくさん話をしたかではなく、学生がどれだけ授業を理解したか、また、その科目にどれだけ興味を持てたかにある。

本稿の締めくくりとして、良い講義と好ましくない講義についてそれぞれの特徴を以下に挙げることとする。

４．１　良い講義とは

⑴　是非知らせたい内容については、分かりやすくポイントを絞る

⑵　内容を知らせる工夫が見られる

⑶　言葉に対するセンスが良い

⑷　自分のスタイル、教材、場面ごとに適合した声、身振り・手振りなどのジェスチャーをできるだけ多彩に活用する。

静かな様子で整然と論理的に話しながら学生を引き込む場合もあるが、一般的に、エネルギッシュで表現豊かな講義は、聴き手の注意を集中させ、興味を喚起させるのに役立つ。

⑸　学生への思いやりがある

教える立場でなく、聴く立場、つまり、学生の立場で話すことである。

⑹　熱意と情熱を込めて話す

４．２　好ましくない講義とは

⑴　早口でポイントが絞れない

⑵　話し方が一本調子で、メリハリがない

⑶　レジュメのプリントが読みにくく、また、データが古くて役に立たない

⑷　聞いていると暗くなってしまう

⑸　自慢話をする

誰でも一番したい話は自慢話であるが、一番聴きたくないのは他人の自慢話である。自慢をして、聞き手に好感を持たれる場合は、ほとんど絶無である。ただし、自分の失敗の話は、自慢らしく行った方が面白いときもある。なお、自慢話と反対に自分自身や学科目について、やたらに卑下してみせることも「好ましくない講義」の特徴といえる。

⑹　時間にルーズである

以上、効果的・実践的授業のすすめ方について筆者の体験を含めて述べたが、将来機会があればさらに発展させた詳細な論文を掲載したいと考える。

現在、授業力について各方面から論議されているが、「顧客満足の反対語は教育」だと言った人がいるということが最近の新聞に掲載されていた[15]。「教える」、「教えられる」という関係である以上、教員は全面的に学生に迎合することはできないが、学生のニーズに応えつつ授業効果を上げる努力をすることも必要である。

注

1　長田豊臣「JUAA」39号1頁（大学基準協会、2007年10月1日）。

2　多くの大学は現在、多種の専門教養科目の履修可能性、情報処理教育の充実、国際感覚を養成するための海外提携校との交流、インターンシップ等、それらの教育課題を充足させるカリキュラムが準備され、また、これらの具体的な教育内容の変化によって、従来の大学教育の評価方法も大きく変化してきたのである。

3　大学の自己点検・評価とは、大学が教育研究水準の向上や活性化に努めるとともに、その社会的責任を果たしていくため、その理念・目標に照らして自らの教育研究活動等の状況について自己点検し、現状を正確に把握・認識した上で、その結果を踏まえ、優れている点や改善を要する点など自己評価を行うことをいう（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/）。

また、認証評価については、学校教育法109条に「教育研究等の総合的な状況について、政令で定める期間ごとに、文部科学大臣の認証を受けた者（認証評価機関）による評価（認証評価）を受けるものとする。」と規定されている。

4　FDとは、教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称である。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる（中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申（2005年1月28日）。なお、神戸学院大学では、「FDとは、本学の教育にかかわるすべての組織及びその構成員が、大学憲章にもとづく教育目標の達成を目指して行う、教育の質向上のための組織的で継続的な取組み」と定義している（神戸学院大学教育開発センター「FDC　Newsletter」通号No.4、2頁（2010年5月31日））。

5　文部科学省の「大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について（通知）」（2007年7月31日）によれば、大学設置基準25条の3の規定によるいわゆるファカルティ・ディベロップメント（faculty development ：FD）については、これまで努力義務であったものを義務化するものであるが、これは大学の各教員に対し義務付けるものではなく、各大学が組織的に実施することを義務付けるものであるということである。これを踏まえ、各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組を行うことが望まれることとされている。

6　神戸学院大学第15回FD･SD講演会の報告については「神戸学院大学FD･SDニューズレター」No.53（2008年1月21日）参照。

7　川嶋太津夫「大学授業改善の実相を追う」（Benesse教育研究開発センター、2005年4月）。
(http://benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2005/04/02univ_01.html)

8　アドミッション・オフィス（AO）入試とは、通常の学力試験では判断できない一人ひとりの個性や学ぶ意欲を評価するため、出願者自身の人物像を学校側の求める学生像（アドミッション・ポリシー）と照らし合わせて合否を決める入試方法である。推薦入試との違いは、高校の校長からの推薦が不要であること、評価平均など高校での成績が問われず、一定の条件を満たしていれば自らの意思で自由に出願できることなどの特徴がある。

9　727大学の内訳は、国立86、公立74、私立567となっている（文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（平成20年度）」19頁（2010年5月26日））。

10　私立大学情報教育協会『平成19年度私立大学教員の授業改善白書』5頁（2008年5月）。

11　Panton,J.H., *Modern Teaching Practice and Techinique*, Longmans, Green and Co. 1947, p.3.

12　他己紹介とは2人ペアになり、相互にインタビューしあい、それを他の人達の前で紹介してもらうことである。他己紹介の効果としては、目的達成に必要な情報を得る為の質問構成力や情報収集能力、聴取した情報を正確かつ円滑に報告するプレゼンテーション能力などを養うことが期待できることである。

13　Brankley,A.,et al., *The Chicago Handbook for Teachers : A Practical Guide to the College Classroom,*

The University of Chicago, 1999（小原芳明監訳『シカゴ大学教授法ハンドブック』28 頁（玉川大学出版部、2005 年））。

14　発音練習については、「早口言葉」なども含めて、拙著『効果的な講義・講演のすすめかた―眠くさせない話し方の技術―』（第 3 版）143 頁～ 146 頁 (保険毎日新聞社、2005 年) 参照。

15　日本経済新聞（朝刊）2010 年 12 月 6 日。

〈参考文献〉

1　赤堀勝彦『効果的な講義・講演のすすめかた―眠くさせない話し方の技術―』（第 3 版）（保険毎日新聞社、2005 年）。

2　浅野誠『授業のワザ一挙公開―大学生き残りを突破する授業づくり―』（大月書店、2002 年）。

3　Beard,R.M. and J.Hartley, *Teaching and Learning in Higher Education*, Harper & Row, Publishers, 1984（平沢茂訳『大学の教授・学習法』玉川大学出版部、1986 年）。

4　Bligh,D.A., *What's the Use of Lectures ?* D.A. and B.Bligh,1971（山口栄一訳『大学の講義法』玉川大学出版部、1985 年）。

5　Bowley, R.L., *Teaching without Tears : A Guide to Teaching Technique*, Centaur Press Ltd., 1961.

6　Elton,L., *Teaching in Higher Education : Appraisal and Training*, Kogan Page Ltd.,1987（香取草之介監訳『高等教育における教授活動―評定と訓練―』東海大学出版会、1989 年）。

7　学習技術研究会編著『知へのステップ―大学生からのスタディ・スキルズ』（改訂版）（くろしお出版、2006 年）。

8　洞口治夫編著『ファカルティ・ディベロップメント―学部ゼミナール編―』（白桃書房、2008 年）。

9　池田輝政＝戸田山和久＝近田政博＝中井俊樹『成長するティップス先生―授業デザインのための秘訣集―』（玉川大学出版部、2001 年）。

10　Johnson,D.W., R.T. Johnson and K.A.Smith, *Active Learning : Cooperation in the College Classroom*, Interaction Book Company, 1991（関田一彦監訳『学生参加型の大学授業―協同学習への実践ガイド』玉川大学出版部、2001 年）。

11　経済学教育学会編『大学の授業をつくる―発想と技法―』（青木書店、1998 年）。

12　木野茂『大学授業改善の手引き―双方向型授業への誘い―』（ナカニシヤ出版、2005 年）。

13　古宮昇『大学の授業を変える』（晃洋書房、2004 年）。

14　京都大学高等教育研究開発推進センター編『相互研修型 FD の組織化による教育改善 2007―4 年間の活動の成果と自己評価―』（2008 年）。

15　清水亮＝橋本勝＝松本美奈編著『学生と変える大学教育―FD を楽しむという発想―』（ナカニシヤ出版、2009 年）。

16　東北大学高等教育研究開発推進センター編『ファカルティ・ディベロップメントを超えて』（東北大学出版会、2009 年）。

17　徳川無声『話術』（白揚社、1996 年）。

18　宇佐美寛『大学授業入門』（信堂、2007 年）。